

## 「赤松小学校での生活科におけるモルモット飼育の実践」

鹿島正史 恩地澄子 増田美和

### 1 はじめに

本校では、平成8年からモルモットの飼育活動を始め、現在にいたるまで1、2年生の生活科活動の単元の一つとして位置付けられている。

現在では、4匹のモルモットをクラスごとに交代でお世話をしている。

主に2年生が飼育活動を行い、二学期末に2年生から1年生に引き継がれる。

1年間の飼育活動ではあるが、日常生活の中で、自然や小さい生命との触れ合いが乏しくなっている現状の児童にとっては、飼育を経験することによって、「やさしさ」「思いやり」「責任感」「協力」などの心をはぐくむことができると考えている。

### 2 生活科における飼育活動設定の理由

身近にいる生き物を飼ったり育てたりしながら、育つ環境、変化や成長の様子に関心を持ち、生き物も自分たちと同じように生命をもってすることに気づき、小さな生命への思いやりの心をもつようにすることを目標としている。

#### 【単元目標】

飼育活動を通して、生き物との出会いを楽しみにし、その姿や鳴き声、肌触り、息づかいを感じとったり、生き物が育つ環境に関心を持ち、自ら考えたり調べたり、変化や成長の様子を自分なりの方法で表現したり、生き物の世話を通して、その成長や変化に喜び、生命の大切さを実感する。

### 3 飼育活動に関する子供の実態

- ① 生き物への興味関心は比較的高い。校庭で見つけたダンゴムシやアリ、おたまじゃくしをつかまえて、飼おうとしたり、可愛がったりしている。
- ② 家庭では、カブトムシや金魚など生き物を飼った経験のある児童は約4割いる。哺乳類などは少数である。
- ③ 家庭での飼育に関しては、自分自身で責任をもって世話をするというより、周りの大人が中心に世話をを行い、児童は手伝うというかわり方が多い。

- ④ 1年生は2年生のモル世話の様子に興味をもって見ている。また、休み時間などに2年生がモルモットと遊んでいるのを近くで見ている、抱き方などを教わっている場面も見られた。2学期に引き継がれることを楽しみにしている1年生も多い。

### 4 飼育活動の実際と活動での子どもの姿

#### (1) 日常的な世話

現在、本校で飼っているモルモットは4匹。月・水・金の週三回の世話の時間をクラスごとに分担しお世話している。各クラスの中で、グループごとに担当のモルモットを決め、モルモットの「すみか」である「飼育ケース」の清掃を行ったり、えさを新しく交換したりするなど仕事を分担し、協力して取り組んでいる。えさは、モルモットが好みそうな野菜や果物を家庭から持ってきて、モルフードに混ぜて与えている。



「飼育ケース」の清掃が終わったあとは、「触れ合いタイム」として、担当のモルモットと交流する時間を設け、モルモットと触れ合う時間を十分にとっている。普段、ケースの中にいるモルモットを広い場所に出して遊ばせたり、えさを食べさせたり、暗いところを作って隠れ場所を作ったり、モルモットのことを考えて、モルモットのためになることを自分たちで考え、行動している。

最後に、学級で集まり、お世話や「ふれあいタイム」で発見したことを発表し合い、次の飼育に生かせるようにしている。



## (2) 観察記録カードより

### ● モルモットの特徴

「なき声は、キューンと鳴きます。」

「しろまめは大きな歯がちゃんと2本あります。ひげが3本以上あります。目がビー玉みたいです。」

「くろまめは、ほかのモルモットよりつめが長いです。」

「しろまめの耳の色は左右でちがいます。」

「チョコの足の裏を見てみたら、肌色のぶにぶにしたものが付いていて、ぶにぶには体の一部だと気が付きました。ぶにぶにをくすぐっても何も反応がありませんでした。よく見てみたら、石などの硬いものを踏んでも大丈夫なことに気が付きました。」

### ● 食べ物について

「しろまめにりんごをあげたら、うれしそうだった」

「モルモットが新聞をかじっていたので、にんじんをあげたら、おいしそうに食べていました。」

「モルモットの花壇の上で散歩させていたら、花壇に生えている草を食べ始めた。」

「くろまめは雑草や笹の葉が大好きです。食べさせるときは、モルが草をくわえたら、手を離さないとかまれてしまいます。」

### ● モルのすきなこと・場所

「カフェは日陰が好きです。日向で遊んでいたら、暴れたので、日陰に連れて行ったら暴れなくなりました。」

「ちょこは、花壇が好きです。花壇の草を食べています。花壇から出そうとしても嫌がって逃げてしまい出てきませんでした。それくらい花壇が好きです。」

## (3) モルランド

1年間世話してきたモルモットを1年生に引き継ぐ時期が近づき、「引き継ぐ前にモルモットと楽しい思い出を作りたい。」「最後に何かしてあげたい」という気持ちの子供たちの中で高まってきた。「モルモットは放つと暗いところに隠れるから、ダンボールで小屋やトンネルを作ってあげよう」「モルモットの好きな野菜でいっぱいにしてあげよう」「モルモットが遊べる場所を作ってあげよう」「モルモットは運動不足で太ってきたから、運動させたい」

こうした気持ちから、これまでの飼育活動で培ってきたモルモットに関する知識を使って、モルモットに喜んでもらえるような「モルランド」を作った。



それぞれのグループのモルランドを合体させて、大きなモルランドを作った。



モルモットたちは、見られていると遊びにくいのではないかと、気が付き、モルランドから離れて様子を見るようにした。

すると、モルモットたちは4匹で走り回ったり、えさを食べ始めたり、モルモット同士で関わったりし始めた。

モルモットの自然な姿を見た児童はとても

驚いていた。「モルモットは、こんなに早くはしれるんだ」「モルモットもあそんだりけんかしたりする友達がほしいんだ」「暗いだけじゃなくて、人が近くにいないと元気に遊ぶんだ」など、日常の活動ではわからないことを発見することができた。

モルモットの本当の気持ちを知る、考える、きっかけになったようだった。

### (3)モルモットの世話の引継ぎ

2学期の11月、1年生にモルモットの世話の引継ぎを行った。

#### 【1、2年生のペアで世話の仕方を引き継ぐ】

##### ● 注意してほしいこと

「モルをだっこするときは、モルを横にしてだっこすると喜んで、おとなしくなってくれます。」

「だっこはモルにとっては怖いことなので、ずっとさわってばかりしないようにします。」

「カフェは長いえさじゃないと、手をかまわれず。」

##### ● 掃除のコツについて

「ケースを洗うときは、水がはねるので、あまり強く水を出しすぎない。」

「ごみを捨てるときは、新聞紙の端と端を持って捨てる、やりやすいです。」

「干草を入れるときには、干草ケースを隣に置いて入れるとこぼしません。」

このように、世話の引継ぎでは、異学年との関わりを学ぶだけでなく、どうしたら1年生が上手にお世話できるかという問題意識をもって活動するという取り組みになっている。

生活科の基本は体験である。モルモットという「対象」との関わりから「体験」が生まれ、その体験をもう一度振り返ることで「気づき」が起こる。さらに、その「気づき」を教師が見取って、カードに朱入れをしたり、「どうしてだろう」など問いかけたりすることによって、「知・情・意の活性化」が生じ、問いが生まれたり、納得したり、共感したりなどさまざまなことが起こり、「次にこうしてみたらどうか」という次の活動が誘発されていく。こうしたサイクルの積み重ねによって「学びの質」を高められているというのが、本校の実践の大きな成果である。

こうした学びの質の高め方は、他教科の問題解決学習へと結び付いているとも言える。

そしてまた、子供たちがモルモットという命に触れ、純粋に愛おしいという感情をもち、生命を尊重しようとする道徳教育にも役立っている。

## 6 課題

こうした取り組みは、生活科という教科を通じた1、2年生だけのものであり、他の学年では行われていない。そのためか、低学年では頑張っている、高学年になるとウサギやその他生き物の世話などを、積極的にやりたがらない児童が増える。

動物飼育を通じた学びが、小学校生活の中で一貫とした教育となつて、高学年になつても継続できるように、学習計画やカリキュラム、またモルモットの飼育形態や環境設定などのあり方についても見直す必要があると言える。

(東京都大田区立赤松小学校)



## 5 飼育活動による成果